

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

大瓶狸々「酒の湧き上がる壺の作り物」製作の記録

著者	野口 隆行
出版者	法政大学能楽研究所
雑誌名	能楽研究
巻	43
ページ	83-90
発行年	2019-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00021735

大瓶狸々「酒の湧き上がる壺の作り物」製作の記録

野口 隆 行

能《大瓶狸々》は観世流の演目である。酒好きの妖精・狸々が多くの仲間を引き連れて登場し、にぎやかに酒を飲み、舞い戯れる。その舞台の正先には、曲名にもある大きな酒壺（大瓶）の作り物が据え置かれる。

鴻山文庫蔵「九条忠孝本転写『観世流作物之図』（以下『作物之図』とする）所収の《大瓶狸々》作り物の項には、現在のものにはない、酒壺の蓋を取ると中から酒が湧き上がってくる仕掛けの存在が記されている。二〇一八年に開催された法政大学能楽研究所資料展示「能付け資料の世界―技芸伝承の軌跡をたどる―」にあわせ、能楽研究所の依頼によりこの作り物の復元を試みたので、製作する上で検討したことなどを記録する。

なお、曲名では「大瓶」であるが、『作物之図』本文では「壺」と説明されているので、以下においても「壺」とする。また丁裏には柄杓についても記載されているが、今回は製作しなかった。

1 壺

壺と蓋の作り物は、現在の《大瓶狸々》においても使われている。観世流大成版謡本の挿図や、近年上演された舞台写真を参照しながら検討した。材料は、現在の作り物に通常使われている竹・麻紐・晒布・織物などを使用した。

九条忠孝本転写『観世流作物之図』（法政大学鴻山文庫蔵）

【翻刻】	
大瓶 狸々	
蓋 口指渡シ	一尺七寸
上ノ輪	一尺八寸
下ノ輪	一尺七寸
壺	
墓輪指ワタシ	一尺三寸
ツル八本	七尺五寸
高サ	二尺二寸
肩ヨリ口マテ高サ	五寸六
但二尺七寸六	
口指ワタシ	一尺七寸

正

壺の図

蓋 壺共切レニテ包
フタハカフセブタ也

ツホノ内ニ波長三
一尺五寸程ノ波
十一枚
小波立波十枚
大立波 五枚
ロクセウニテヌル
蓋トルト波ノ
上ルヤウニ作ル
鯨コハセノ様ニ
作ル



観世流の作り物付。九条家旧蔵。寛政九年(1797)。最終丁表に「此一冊者／松殿黄門忠孝卿御筆也／修理亮光貫(花押)」、裏に「這一冊者塩小路光貫所持之本也／令恩借書写畢／上総介祐(花押)」「寛政第七初秋上旬書写之／右少史行(花押)」、続く裏表紙見返しに「申請右少史本為予蔵書者也／并以石摺本請之云云／寛政九年五月日／久(花押)」とある。

「塩小路光貫所持」の「松殿黄門忠孝卿御筆」本が、何度か転写を繰り返して伝わったらしい。忠孝は九条尚実の子で、塩小路光貫は九条家の諸大夫(家司)。ともに観世元章や片山に師事した人物と考えられている。塩小路は禁裏の内々の能でシテを演じた記録もある。観世流が演じなかった〈大蛇・竹雪〉を含むことから、禁中能の実態も投影されていると思われる。



【蓋】

『作物之図』には上下に使う輪の寸法と、「カブセブタ」であることが記されている。「下ノ輪」と「口指渡し」が同寸で、同じものを指しているようだが、直径の小さい方を口とする確認の意味に解しておく。

挿図には、ある程度の深さのある円い蓋が描かれているので、二つの輪の間をつなぐ縦方向の竹を補った。深さは壺の「肩ヨリ口マデ高サ」に対応すると考えてよいと思う。また、上の輪には薄い板をはめ、後述する「波ノ上ル」仕掛けを蓋で押さえておけるようにした。

なお、現在の上演に用いる蓋は、直径よりも大きな方形の布で覆い、それに紐をまわして結び、装飾的にしてある。『作物之図』の挿図とは異なるが、挿図の形状のままのほうが、かぶせ蓋という記述とは合っているように思う。

【壺】

壺についての記述をみると、「台輪」（最下部）と「口指ワタシ」の寸法の関係が気になる。台輪の方が口よりも直径が四寸小さいはずだが、挿図では逆に、底の大きな安定の良い壺が描かれている。口の直径は蓋の直径と合致しているの間違いはない。台輪の寸法の書き間違いを想定するよりは、挿図が正確でないと考える方がよさそうに思う。現在の舞台写真をもても、壺の形状・大きさは一定ではない。

「ツル」は壺の胴を形づくる細長い竹である。8本が同寸であることから、縦の骨組みになることがわかる。記述の長さは、壺の両側面に用いるのに十分であり、8本を中央で放射状に交差させて16本の縦骨となる。交差させたところは当然壺の底側になる。また、記述にはない横方向の骨組として、胴や肩の輪が何本か必要なのでこれを補った。さらに記述に無い工夫として、台輪と口の輪を直結する柱4本を付け加え、ちょうど「立木台」の作り物と同じよ

うな構造を内部につくることにした。これによって、記述どおりの全体の高さ・肩の位置が決まり、全体が歪みにくくなる。また、今回の復元で問題となる波の仕掛けを設置するためにも必要と考えた。

組み上げてみると、胴の直径が90 cm近い、大ぶりの壺が出来上がった。

2 波

『作物之図』の波についての記述をみると、波そのものの部品数などは詳細であるのに対して、肝心の波が湧き上がる仕組みについては、ごく簡単な説明でしかなく、その部分の挿図もない。能の作り物としては工夫を凝らした仕掛けであるのに、記録としてこのようなことはあるのだろうか。想像するに、この書をまとめた時点で、この作り物は既に壊れてしまっていて、部品の残骸を見て記録したのではないか、湧き上がる仕掛けについても、見た人からの聞き伝え程度だったのではないだろうか。言い訳がましいことを述べて、以降は創造の度合いが強くなることをおこわりする。

【波】

波は「一尺五寸程ノ波」「小波立波」「大立波」の3種26枚。「小波」「立波」は別かもしれず、小波は「こなみ」か「さざなみ」かもわからない。挿図の波も記述に対応させるほど正確に描かれていない。素材としては和紙や革などが考えられるが、今回は、波の部分は和紙、下部の仕掛けに設置する部分には竹ひごを用いた。

ところで挿図のような波を大小それぞれ記述の数だけ製作し、実際に壺の口に配置してみると、あまりにも多くの部品がひしめき合って、とても波のようには見えなくなってしまった。立波を少しずつ剪定し、「一尺五寸程ノ波」

については、立波ではない「ただの波」と解釈することにして、挿図にはないが、うねりのような水面の盛り上がりに変更した。

これを「ロクセウ（緑青）」で色付けし、胡粉で波頭を白くした。緑青は比較的青みの強いものを選んだが、それでもかなり緑がかっている。緑青だけにこだわらなくてもよいと思う。

【湧き上がる仕組み】

復元のための最大というよりほぼ唯一のヒントは、「鯨コハセノ様ニ作ル」である。ヒゲクジラのヒゲは、非常にしなやかな弾性のある加工容易な素材で、さまざまなからくりのバネやゼンマイとして使われてきた。ここもやはり、湧き上がるためのバネにクジラのヒゲを利用するということであろう。

「コハセ」は「コハゼ」と思われる。足袋などの衣類、書物の帙などの合わせ目を留める爪状のもので、実際に足袋のコハゼをクジラのヒゲで作ったこともあったようだ。ただ、爪程度の小片で波の湧き上がる仕掛けを作ることとは考えにくく、「ノ様ニ」という部分を拡大解釈して、ヒゲを薄く加工するという意味に考えることにした。

仕組みについてはいくつかの方式を考えたが、ここでは不採用案は説明せず、採用の条件としたことを挙げる。

①波が壺の口で絡まないこと

波は大小合計26枚もあり、形状も複雑であるので、壺の口で互いに絡まりやすい。そのため、それぞれの波にバネをつけて独立した動きをさせることは困難である。

②弱いバネでも持ち上がること

多くの波をそれなりの高さまで持ち上げるためにバネは強くしたいが、一方で、蓋の重さで押さえられなければならない。猩々が舞台上で取り上げる蓋に、あまり重量があつては具合が悪い。バネはなるべく少なく、弱くしたい。

③後見が片づけやすいこと

挿図に描かれた波は、噴水のように壺の口の外側まで勢いよく飛び出していて面白いのだが、能が終わって後見が作り物を幕へ引く際には、このままではなく蓋をして元のように収めてから引きたい。

以上のようなことを検討し、最終的に、竹筒を用いたピストンを作り、それに波を取り付けて、クジラのヒゲのバネで動かすことにした。壺の立木台構造を利用して、中心に大型のピストンを設置し、立波を大小まとめて持ち上げる。4本の柱のうちの3本に小型のピストンを設置し、その他の波を持ち上げる。これによってバネの数を絞り込み、波が互いに絡みにくい場所に配置することができた。また垂直方向に持ち上がった波の頭を、蓋で押し戻すこともできた。なお、立木台構造の4本柱のうち、1本に波を取り付けずに空けておいたのは、そちらを作り物の後方として舞台鏡板側に向ければ、猩々が壺から酒を汲む型をする時に、いくらか邪魔にならないだろうと考えたからである。

3 実作品を見て・まとめ

最終的にバネの形状や取付位置を苦労して調整した結果、壺の口より上に20 cm強は酒の波を湧き上がらせることができた。私の技術的な問題や、手持ちのクジラのヒゲを使用した材料面での制限がなければ、さらに上げることもで

きたかもしれないが、『作物之図』の挿絵と同程度にはなったと思う。

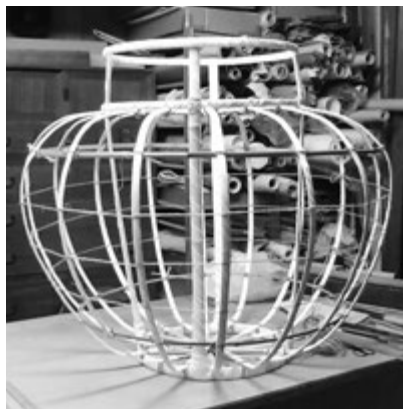
しかし実際に壺に蓋をし、取り外してみると、案外と感動が薄い。法政大学能楽研究所に納品し、諸氏に見ていただけでも同様の反応であった。理由としては、蓋を外した者の視線が上からのぞき込む角度であるため、壺の口から上がった高さを感じにくいこともあり、また、蓋に深さがあるために、蓋を外したときには既に波が上がりきっており、湧き上がる動作が全く見えないことも、いくぶん期待外れだったのだと思う。

想像の域をでない話だが、『作物之図』に記録された当時の作り物も、実際の上演における反応が、構想から苦勞して形にしたわりには、思ったほどではなかったのではないだろうか。少なくともこの仕掛けが、後に普及することは全くなかったのだから。

そうは言っても、当時の能役者たちが、作り物にこのような仕掛けを構想し、観衆の目を惹こうとしたことを想像するのは楽しい。《大瓶狸々》の曲趣を考えれば、なにか祝賀的な状況において上演が企画され、さらにいつそう盛り上げるために考えられた仕掛けなのだろう。観衆と役者の想い、当時の能の生命力が感じられる。

《土蜘蛛》の蜘蛛の糸も、当初はわずかな筋であったものが、発明的工夫で現在のようになったと聞く。酒の波もまた作り物における工夫の記録として貴重なものではないだろうか。今回の復元は、私の乏しい創造力に頼った試作ではない。本文の解釈を含め、各位のご教示を仰ぎたいとおもう。

壺骨組み



中央の波を持ち上げるクジラのヒゲのバネ

